



「武蔵国府のマチ」の模型は、
東西 3.3km、南北 2.3km の範囲
を復元しています。
こんにち
今日の地図と照らし合わせると、
東府中駅から分倍河原駅までが
すっぽりと収まります。



模型の範囲

古代武蔵国府

展示解説シート Provincial Capital **Musashi-Koku** of Ancient 府中市郷土の森博物館

武蔵国府のマチ 復元模型

国衙を中心として広がる〈国府のマチ〉
の空間を模型で復元してみました。

年代は、750 年前後（8 世紀半ば / 奈良時代）。マチの北方で国分寺の建設が急ピッチで進み、国衙の建物も瓦葺きに改められた頃です。

模型の西端には東山道武蔵路という国道が南北に縦走し、国衙の東隣には「多磨寺」と呼ばれた寺院がありました。その南方の低地には、水田が開かれていたと推測されます。

模型制作時、この範囲で発掘された竪穴建物跡は 4,000 棟を越え、未発掘のものを含めればその総数は 2 万棟に達すると推測されていました。こうした数値から、750 年頃に同時存在した竪穴建物の数を推定しました。

竪穴建物の多くは庶民の居住の場でしたから、1 棟に 3~4 人が住んでいたとすると、国府のマチに暮らす人々は 2,000 人を越えていたことになります。ふつうのムラとは隔絶した規模の集落であったことは間違いありません。国府は単なる政治の拠点ではなく、当時としては多くの人口を抱えた都市的な空間だったのです。

なおこの模型は、発掘調査の成果を最大限に取り入れています。もちろん想像した部分も少なくないことをお断りしておきます。縮尺は 1/450 です。



国府とは何か

奈良・平安時代、日本列島の多くの部分は今の奈良や京都を都とする中央集権的な国家体制に組み込まれていました。列島には60余りの国が置かれ、各国には郡、さらに郷が設置され、地域支配が行われるシステムでした。

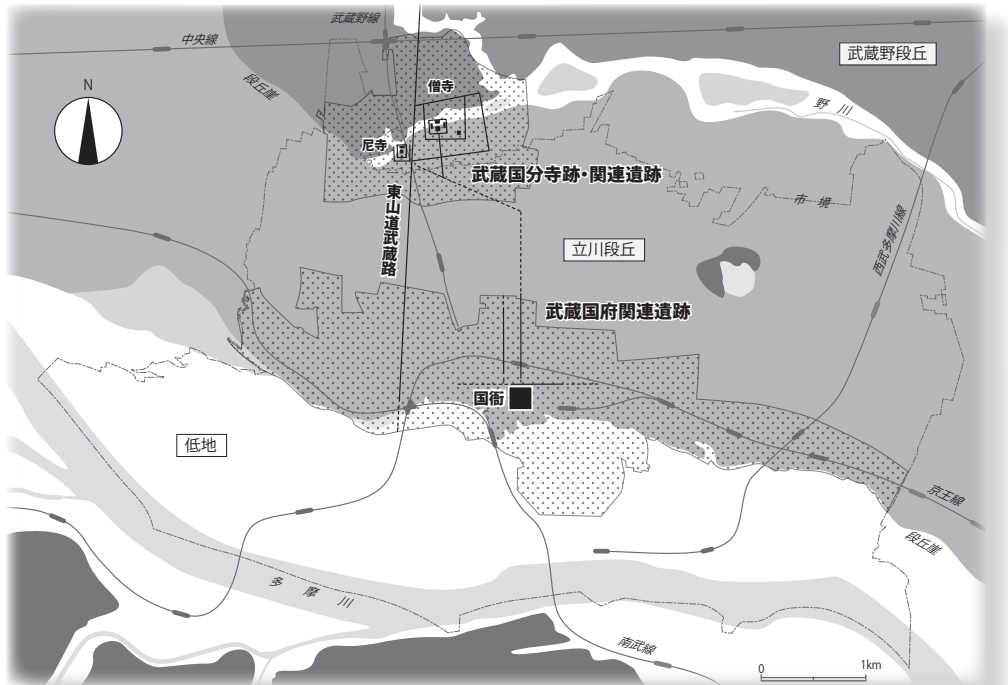
各国には役所が設置され、一国の行政・警察・司法・宗教などに絶大な権限を持つ**国司**という役人が都から派遣されました。こうした国の役所の所在地を「**国府**」と呼んでいます。

現在の東京都と埼玉県そして神奈川県川崎市と横浜市の大部分は、**武蔵国**に属していました。その国府が、ここ府中に置かれていたのです。

武蔵国は21郡を管轄する広大な国であったため、国司の定員も多く、守・介・大掾・少掾・大目・少目という役職があり、彼らを補佐する3～5人の史生も都から派遣されていました。

↓ 国府と国分寺の遺跡

武蔵国府関連遺跡は、**国庁**を取り巻く役所群（**国衙**）を中心に段丘崖に沿って展開しています。**武蔵国分寺跡・関連遺跡**はその北方にあり、僧寺や尼寺の中心伽藍は国分寺市域にありますが、遺跡は府中市域にも広がっています。国府関連遺跡から北へ延び、国分僧寺と尼寺の間を突き抜ける道路跡は、当時の国道で**東山道武蔵路**と呼ばれ、都につながっていました。



武蔵国は21の郡からなる大きな国でした。国府は多磨（麻）郡にありました。



国府関連遺跡

武蔵国府関連遺跡は、段丘崖（崖線）に沿った段丘上のみならず崖下の低地にまで展開する、広大な遺跡群です。その名称のとおり、古代国府とそれに密接な関連を持つ遺跡です。1975年以来、市民の協力のもと発掘調査が継続されており、今では2,000か所を越すまでになりました。その結果、多くの貴重な情報が蓄積され、古代国府の実態を探るうえで全国的にも欠くことのできない遺跡として評価されています。

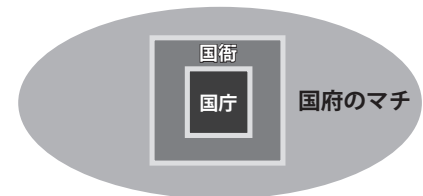
府中市の北隣の国分寺市には**武蔵国分寺跡**があり、その周囲に遺跡が広がっています。古代において、この一帯は政治・宗教・文化の中心地でした。

国府の中枢

国府の一面には、国司をはじめ役人たちが執務するさまざまな役所が建てられていました。とくに重要な政務や儀式を行う場が**国庁**と呼ばれる施設で、他の国府跡の発掘調査によって、堀などで囲まれたなかにひととき大きな建物が整然と立ち並んでいたことがわかっています。

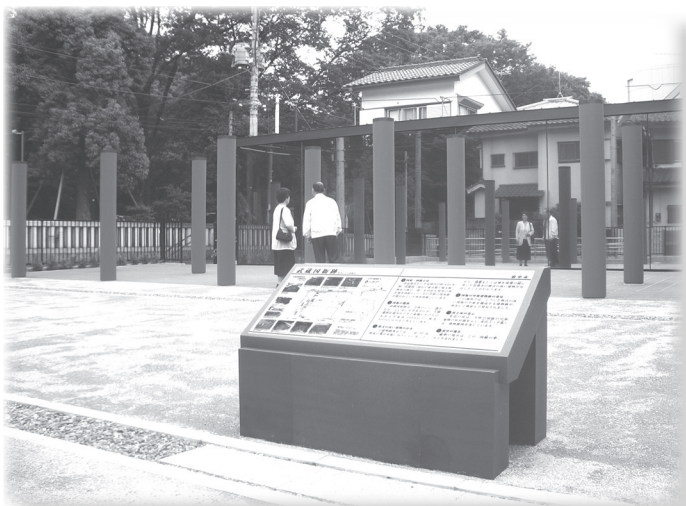
府中市のほぼ中心部、大國魂神社境内から東側の一帯には大きな溝に囲まれた区域があり、その内部では整然とした配置で大型の掘立柱建物や礎石建物の跡が見つかります。長さ20m以上の大きなものもあり、瓦も出土しているため、瓦葺きの建物をふくむ壮大な建物群の存在が想像できます。さらに、武蔵国内の郡の名前を記した瓦やレンガ（塼）が出土することこの一帯の大きな特色です。郡名を記した瓦やレンガは、建物の建設に当たって国内の各郡が協力したことを示しています。

つまり、これら郡名のある瓦やレンガの出土地には、武蔵国を挙げて建造した建物が存在したことになります。それは、国府の中枢である**国庁**とそれを取り巻く役所群（**国衙**）以外に考えられません。



← 武蔵国府の概念図

儀礼・政務を行う国庁を中心に、その周囲に役所群の国衙、さらにその周りには関連施設や人びとが集まるマチのような空間が広がっていました。マチの範囲は南北最大1.8km、東西約2.4kmと推定されています。



↑ 国衙跡

国の史跡に指定されていて、一部は発掘調査の成果に基づき史跡公園として整備されています。奥に見える木々は大國魂神社です。

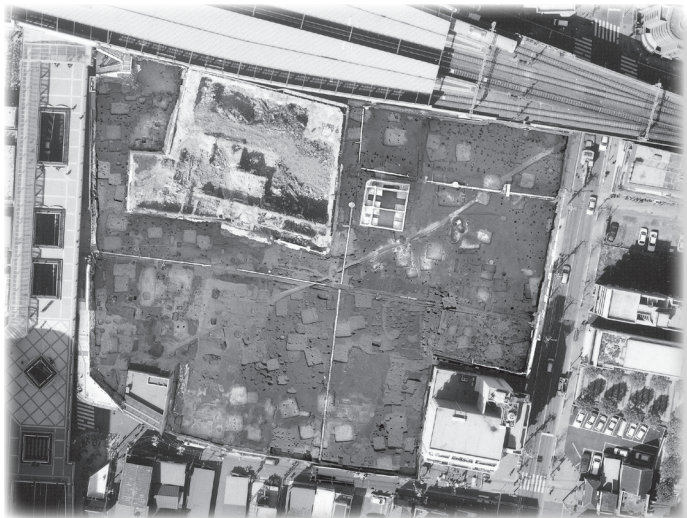
国府のマチ

武蔵国府関連遺跡でこれまでに発掘された竪穴建物跡は6,000棟、掘立柱建物跡は1,400棟を超えています。とくに建物跡が密集している**国衙**を中心とした東西約3kmの範囲が国府として意識された特殊な地域と考えられます。発掘調査の進展により、ところどころで道路の痕跡も確認され、町並みを想像できるようになってきました。

国府のマチでは、庶民の多くは竪穴建物に住んでいたようです。これまでに調査した面積から推計すると、東西3km程の範囲に数万棟に達する竪穴建物跡が存在することになります。もちろんこれは、およそ8～10世紀の300年間の累積ですが、多い時には1,000棟近くの竪穴建物が同時に存在したと考えられます。

竪穴建物跡からは、鎌や鋤などの農具、手斧や鋸などの工具類、矢じりなどの武器も出土します。農作業に携わる人はもちろん、武蔵国内の各地から役所の建設や国府の警護のために駆り出された人々たちもいたのでしょう。

国府は、壮大な役所群が建ち並ぶだけでなく、周辺のムラとは隔絶した規模を持つ**マチ**だったのです。



↑ マチの発掘状況

京王線府中駅南口で行われた発掘調査の様子です。200棟近くの竪穴建物跡、20棟の掘立柱建物跡などが見つかりました。